

治安の悪い幼馴染におねだりされたから「おちんぽ頑張れ♡」って
素股してたら、いつの間にか逆転して「おまんこ頑張れ♡」って
とん♡とん♡されまくっちゃうお話

ピンポン

インターホンが鳴って、モニターも確認せずすぐにアパートのドアを開けた。ドアの向こうには長身の男性が立っていて、私を見下ろしている。

長髪、ピアス、右手首にタトゥー。平素であれば自分から近づかない風貌の男だ。

そんなにかつい容姿の彼は、信じられないほど優しい顔で笑った。

「みこちゃん、久しぶり」

「久しぶり、葉くん」

いかつい容姿の彼こと葉くんは、四つ年下の私の幼馴染である。

もはや弟のようなものだ。幼少期から葉くんは怪我をするとすぐ私のところに来ていたし、まるで携帯の救急箱みたいな扱いをされていた。

高校なんかは反抗期が凄まじく、ヤンキーと言っても過言ではないほどである。毎日怪我をして帰って来て、挙げ句の果てにお母さんと喧嘩した葉くんは、毎日のように我が家にやってきてはうちのお母さんに「ご飯食べな」と招かれていた。我が家の末っ子存在である。

そんな葉くんは、数年前スカウトされた芸能事務所でモデルのお仕事をしようになった。そのおかげで彼は最近とても忙しそうだったし、私も一人暮らしを始めたので会うのはそれなりに久しぶりである。

と言つても、そう簡単に何かが変わるわけでもない。

「今、ちゃんとモニター確認して開けた？ 俺じやなかったらどうするの」

葉くんは相変わらず、見かけに反して優しい。久しぶりに会えたことが嬉しい私は、上機嫌に返した。

「だって葉くんいつも時間ぴったりだし、遅れるなら連絡くれるでしょ？」

「俺じゃない可能性だってあるじゃん。みこちゃん可愛いんだから気をつけてよ、そういうの」

「ははは」

毎日美女に囲まれている幼馴染に可愛いと言われたところで、正直何も響かない。適当に笑い、部屋の中へと招き入れた。

「それにしても珍しいね、相談なんて」

今日、彼が私のアパートに来ることになったのは「相談したいことがあるんだけど」という彼からのメッセージがきっかけだった。

丁寧思い出を掘り返してみても、葉くんから「相談したい」と言われるなんて初めてのことだ。だから葉くんには悪いけれど、普通に嬉しく思う。

（葉くんが高校卒業した時に「いつでも相談してね！」って手紙を書いたの、無駄じゃなかったんだなあ）

ゴリゴリのヤンキーだったのに、こんな風に誰かを素直に頼れるようになって、その相手に私を選んでくれるんだなあとしみじみしてしまふ。

「どうぞ」とソファアに座るのを促すと、葉くんは座りながら言った。

「不本意ながら、もう頼れるのがみこちゃんしかいなくてさ」

「またそういうことを言う。で、どうしたの？」

「……実は、俺」

葉くんが珍しく深刻そうな顔をしていたから、一瞬だけ身構えた。

お姉さんムーブをかましてしまったけれど「どうしよう」と思う。

もし、私にも解決できないような重たい話だったら。

（いやいや、それでも葉くんは私を頼ってくれたんだから、ここはお姉さんらしく……）

「EDになっちゃって」

「……………え？」

いーでいー。

もちろん知らないわけではない。すぐに『勃起不全』であることは理解ができた。

でも、混乱だ。

大人になったとはいえ、私たちはそういう類の話を一切してこなかったに等しい。でも私も葉くんも恋人がいる時期があったし、なんなら私は長年付き合ってた彼に先日浮気をされて別れたし、『そういう類』を知らない顔をするのも無理があるという話である。

ただ私の頭にはずっと、幼少期からヤンキー時代までの葉くんの顔

があった。

（川で採ったザリガニが死んで一週間くらい落ち込んでた葉くんが……！）

「ED、分かる？」

「あ……う、うん。分かるよ、ごめん。びつくりしちゃって……でも、男の人にとっては大事なことももんね」

慌てて立て直しを試みるけれど、頭の中はまだ大混乱中だった。私がその混乱を鎮める前に、葉くんは続ける。

「みこちゃん、アイツ……彼氏と別れたんだよね？」

「え？ えっと……うん、そう、だけど……」

「じゃあ、ちよつと手伝って」

「へっ？ な、何をっ……？」

混乱に次ぐ混乱である。目を白黒させる私をよそに、葉くんは持つ

てきていた紙袋からガサゴソと何かを取り出した。

赤い生地に黄色と白の線の服。あとポンポン。

畳まれていても、すぐに分かる。チアリーダーのコスチュームだった。

「これ着て『頑張れ♡』って俺のこと応援してくんない?」

何の躊躇いもなくそれを差し出した葉くんは、ニコツと笑った。昔から変わらない、可愛い笑顔である。真顔が怖いタイプだからこのギャップがいいと我が家では評判である。……ではなくて!

「お、応援……!?!」

「いろんな女の子がやってくれたんだけど、どうしても勃たなくてさあ。もうちょつと非日常感があつたらいいかなって思つて。みこちゃんか俺の腰の上でチアコスして『頑張れ♡』って結構な非日常じゃん?」

「じよ、情報量が多い……！」

（そりゃあ葉くんほど顔が良いなら、毎日違う女の子をはべらすことも難しくないだろうけど……！ いや、違う、え？ 何？ 私が葉くんの腰の上で『頑張れ♡』って……!?!）

「だめ？」

大混乱が鎮まらない私の表情に、葉くんは分かりやすく悲しそうな顔をした。笑顔からの落差が激しく、胸の奥がずっと痛む。

葉くんは、「もう頼れるのがみこちゃんしかいなくて」と言っていた。幼馴染にこんなことを頼むなんて、きつととても勇気のいることだったろうに。……いや、ニコツてしてたけど。

（つていうかそもそも私、酸いも甘いも知ったアラサーですし！）

恥ずかしいなんて言う方が恥ずかしい気がした。私に相談したことがない葉くんが、せっかく相談してきてくれたのだ。

「つゝつ分かった！ やってみよう！」



葉くんから衣装を受け取り、目の前で着替えるのは流石に恥ずかしかったので脱衣所で着替えることにした。

明るい色の衣装のスカートは、それはもう短かった。風が吹けばショーツが見える、そんな長さだ。そういうプレイ用なのだろう。

（こんなもの持つてゐるなんて……そりゃあいい大人だからおかしくはないんだろうけど……！）

どうにも私は、葉くんのことをまだ子どもだと思い込んでゐる節が

ある。あんなに大きくなつて、忙しく仕事だつてこなしているのに。

鏡に映る自分を見つめる。胸まで伸びた髪の毛が衣装に合わないと感じたから、ささつとポニーテールにした。急激に「それっぽく」なつて深いため息が勝手に溢れる。

こうなりやヤケだ。

「……よし！」

（頑張つて葉くんのおちんぽを勃起させるぞ！）

どう考えても一生しないはずだった決意を胸に、葉くんのもとへと戻つた。

葉くんはソファーに腰掛けてスマホを見ていたけれど、私を見るなりすぐに笑う。揶揄いが含まれない、妙に居心地が悪くなる笑いだった。

「はは、可愛い」

「……葉くんと言われると複雑だけどね」

「え？　なんで？」

「だって可愛くて綺麗な子なんて見慣れてるだろうし……」

「その中でもみこちゃんがナンバーワン」

「そんなわけではないしょ」

「いやいや、マジで。みこちゃん以外全員ブス、ジャガイモ、有象無象」

「こら。嘘でもそんなこと言っちゃだめだよ」

「ガチでマジだし、勘違いしてるやつ多いから直接言うこともあるし」

「本当に言っちゃだめなやつだからね。気をつけないと、そのうち夜道で刺されるよ」

「はいはい、気をつけまーす」

「……」

葉くんは昔からシスコンというか、こういう過激なところがある。こんな歳にまでなつて「そんなこと言わない」などと注意をするなんて思つていなかった。

短いスカートをポンポンで隠しながら近づくと、ソファアーに浅く座っている葉くんは自分の下腹部を指さしてにこやかに言つた。

「乗つて」

「……！」

脱衣所で覚悟はしてきたつもりだけど、いざ現実になると少し怖気づいてしまう。

体が大人になるにつれて、当たり前前に私たちの身体的距離は遠くなったのだ。当たり前前に、葉くんに乗つかるなんてしたことがない。

（でも、頑張らないと……！！）

それもこれも葉くんのためである。

ショーツが見えそうなのを恥ずかしがっている方が恥ずかしい気がしたから、もう気にしないことにした。ぎしつとソファアを軋ませ、葉くんの体に跨る。

（体、おっきい……）

つい先月別れた彼氏は、一七四センチだった。葉くんは確か一八四センチだから、十センチ差。たった十センチの差異だと言うのに、体の厚さも安定感も段違いのように感じた。私が全体重を乗つけても、軽々受け止めてくれそうだった。

「腰落として」

「……」

憚れてしまうけれど、そっちの方が「それっぽい」のは理解できる。ソファアに膝を埋め込んで、葉くんに少しだけ体重をかけた。

「えっと……あれだよな？　腰振って『頑張れ♡』って言えばいいんだよね？　その、AVみたいな」

「そうそう、それ」

自分からしておきながら、変な会話だと思った。AVの話なんて、「葉くんもそういうお年頃だから」とむしろ避けていた話題なのに。

すぐ近くに、葉くんの顔がある。何が楽しいのか、彼はニコニコと笑っていた。

もしかして恥ずかしいのは私だけなのか、これ。本当に、恥ずかしがつてる自分がバカらしくなる。

「……ちゃんとやるけど、笑わないでね？」

「笑うわけないじゃん。つつか、ちゃんとやってくんないと勃たないし。なんなら俺のこと大好きな彼氏だと思って応援してよ、『今から

エッチするぞ』って感じでさ」

確かにそうだ。勃たせるためにはきつとムードが不可欠。AVだってインタビューから始まるんだから。

（『これからエッチするぞ』って感じで……）

南無三。女は度胸だ。

「が……頑張れ♡ 葉くん♡」

手に持ったポンポンと一緒に、ゆさゆさ♡と腰を揺らした。羞恥心で火照る私の姿を、葉くんが目を細めて笑って見ている。

「かいわい」

恥ずかしい。すっごく恥ずかしい。でも、言ってられない。これも葉くんのためなのだ。

ソファアをギシ、ギシ、と揺らしながら腰を振る。すると、葉くんの大きな手が膝に当たった。そうしてゆっくりと、移動を始める。

「太もも触っていい？」

「えっ……、ッあ……♡」

私の太ももを覆ってしまうんじゃないと思うくらい、大きい手のひらだった。その手のひらにすりすり♡と太ももを撫でられると、体がびくん♡と反応してしまう。

触り方が、まさに「今からエッチするぞ」という感じだ。手のひらは乾いているのに、じつとりとした触り方だった。

（へ、変な声出ちゃった……！　だめだめ……！）

酸いも甘いも知ったアラサーなのだ。『今からエッチするぞ』を覚えてしまっている体を戒め、最初にした決意を思い出す。

（葉くんを勃起させなきゃ……！）

頭の中に『エッチなお姉さん』を召喚する。参考資料はAVだ。あのエッチなお姉さんたちなら、こんな時、躊躇いなんてないだろ

う。

「が……頑張れ♡ 葉くんのおちんちん♡ 頑張れ♡」

「わ、それ最高。もつとエロいこと言つてよ、みこちゃん」

「えつと……！ よ、葉くんちんぽ頑張れ♡ おつきくなーれ♡」

なけなしの知識を総動員して、腰をゆさゆさ♡揺らす。

葉くんのズボンのファスナー部分にショーツを擦り付ける形になつてしまふから、割れ目がしつかりと擦られてしまふ。固い生地に対応したおまんこが、じわあ……♡と湿気を帯びていくのが分かった。

「っ……は……♡」

（葉くんを、興奮させないといけないのに……っ♡）

一応葉くんのために腰を揺らしているつもりだけれど、自分のためとの境目が分からなくなっている気がした。だって、最初よりももっと腰を落として前後に振つてしまっている。

若干理性の揺らぎを感じていると、私の太ももをなでなで♡と触り続ける葉くんが雑談を投げかけるように言った。右手首の内側に、タトゥーが見える。筆記体だから何が書かれているかはいつだって分からない。

「みこちゃん、ブラしてんの？」

「え？ う、うん、してるけど……」

「外していい？」

「えっ」

その問いかけと行動は、ほぼ同時だった。音もなく一発でブラジャーのホックを外され、頭の中が真っ白になる。

「な……っ！」

「目の前に揺れるおっぱいがあった方が勃起そうじゃん？」

「……！！」

それはそう。そうだろうけども。

驚いても腰を止めるわけにはいかなかった。ブラジヤーの支えがなくなつたおっぱいが、たゆん♡と揺れる。それを感じながらゆさゆさ♡すると、ブラジヤーのカップや粗末な生地が、乳首の頂点を掠めていった。

「ッ……………♡　っ……………ふ……………ッ♡♡」

（衣装が乳首に擦れてっ……………声が……………っ♡♡）

ブラジヤーのカップも、衣装も、無防備な乳首を刺激するには十分な固さを持っている。先っぽをこすっ♡こすっ♡と一定のリズムで擦られると、その度に少し跳ねた声が口から漏れた。

「ねえ、『頑張れ♡』って言ってよ、みこちゃん」

「が、頑張れ♡　葉くん……………っ♡　ちんちんおつき、してっ……………♡
んッ……………♡」

「いいね、ちよつとずつおつきしてきたわ」

そう言われて、擦りつけているおまんこに意識を向ける。そこには、確かに硬い何かがきちんとあった。

（え？　これ、ファスナーの部分って思ってたけど、もしかして結構前から勃ってるんじゃないか……!?）

腰を揺らしながらそんな疑念に襲われていると、葉くんはケロッとした口調で言った。まるで「テレビつけていい？」みたいな気軽さだ。

「みこちゃん、おっぱい見ていい？」

「へっ？」

またもや混乱してしまう提案をされ、思わず腑抜けた声が出た。

「やっぱり生のおっぱいの方が勃起そうだし」

それはそう。そうだろうけども！

（お、幼馴染におっぱい見せるって……！　でも、せっかくちよつと勃ってきたんだし……！）

この勢いをなくしたくない、みたいな思考になった。勿体無いとか、どうせならとか、そういうやつだ。

思考をだいぶ揺さぶられている私は、気づけばポんポんを持ったままの手で、ヘソ出しのトップスを捲り上げていた。

もちろん羞恥心がないわけではない。こうなりやヤケだ、が最高潮だったのだと思う。

「あー……」

葉くんが、曝け出された私のおっぱいをじいつと見る。

目元を緩ませ、頬を少し上気させていた。幼馴染の興奮した顔を見てしまったという背徳感と同時に、冷静な自分が一瞬だけ戻ってきた。

（私いま、どんな顔をしてるんだろう……）

ショーツはすっかり濡れてしまっているし、クリトリスも敏感になりきって、葉くんのおちんぽに擦り付けてしまっていた。

（『女の顔』を見せちゃってるような気が……っ）

「みこちゃんのおっぱい、エロ……」

でも、葉くんだって男の顔だった。私のおっぱいから決して目を逸らさない葉くんは、興奮した表情のまま口の端を少し上げた。

「ねえ、なんで乳首勃ってんの？」

「っ……!？」

指摘されて慌てて視線をやると、いつも控えめに佇んでいる乳首は確かにピン♡と勃ってしまった。粗末なコスプレ生地で、デリカシーなしに擦られたせいだ。羞恥心が増すけれど、今更隠すことだつてできない。

「もしかして、みこちゃんも興奮してんの？」

「わ、私のことはいいから……！」

「みこちゃんが苦しうなのに集中なんかできないって」

「えっ？ い、いや、別に苦しくなんか……っ」

「だから舐めるね？ みこちゃんの可愛い乳首」

「へ、あッ♡　だ……ツめえっ……♡♡」

ぱくっ♡

ダメだと言う前に腰を抱き寄せられて、あっという間に乳首を口に含まれた。

葉くんの熱い唇がおっぱいに吸い付き、口内でころ♡ころ♡と勃起した乳首を転がされる。

「あっ♡　んう……はあ……よ、葉くっ……♡」

（葉くんが、私の乳首を転がしてる……っ♡　赤ちゃんみたいに噛みつ

いて……♡ エッチな転がし方してきてるっ……♡)

「はは、エッロ……みこちゃんの乳首、ちっちゃくて可愛いね。こりこり♡してる」

「や……ッ♡ だめ……っ、葉くん……ッあ、ん……♡」

「みこちゃんてセックスの時、そんな声出すんだ？ エッチな声。みこちゃんじゃない、女の声だね」

「……ッ……♡」

羞恥心を煽るような言い方をしながら、葉くんは上目遣いでちらちら♡と乳首を舐めた。

腫れ上がった乳首が葉くんのピンクの舌で何度も倒されるのを、ジッと見てしまう。どうしても、「セックスの時」の声が漏れ出た。

(葉くんに聞かせるような声じゃないのに……っ♡)

恥ずかしくて口をまっすぐ結ぶと、葉くんは乳首をコリコリ♡コリ

コリ♡と舌で遊びながら私の腰を強引に揺らした。

「ほら、腰ちゃんと動かして？ 結構いい感じに硬くなってきたよ、みこちゃんのおかげで」

「んっ♡ ツ、……あっ………んんッ………♡」

「頑張れって言って？ みこちゃん」

葉くんの言葉と、粗末なポンポンのくすぐったさが不意に本来の目的を思い出させた。

（そうだ……葉くんを勃起させないと……っ♡）

服を捲っていた手を離す。服の中に潜り込む形になった葉くんに乳首をちろっ♡ちろっ♡と舐められながら「頑張れ♡」を再開した。

「が、頑張れ葉くん♡ んっ♡ お、おちんぼ頑張れっ……♡ おっ

ぱい舐めて、ッん、いっぱいおつきく、してえ……っ♡ あッ♡」
「ん……じゃあ、いっぱい舐めるわ」

「え、そうじゃな……ッあ♡♡」

れろッ♡　れろお♡♡

舌の先で遊ばれていた乳首を、今度は舌全体で弄ばれる。大きく舐められたり、かと思えば乳輪をくるくる♡れろれろ♡と回られたりして、葉くんが「ん……」と色っぽい声を落とすから頭が熱くなった。

「ひ、ッ♡　だ、だめ……っ♡　ん……ッ、れろれろ♡しちや……っんあ……♡」

「あーっやば……可愛い……」

ちゅぱッ♡　ちゅぱッ♡

私のおっぱいに向かって呟く葉くんは、ピン♡と勃った乳首を吸って音を鳴らす。恥ずかしい音と快感に、一段と甘い声が出た。

「やっ♡　ん、吸うのもだめっ……♡　あッ♡　ちゅぱちゅぱ♡しない、でえっ……♡」

「はは、ちゅぱちゅぱ♡だつて。かーわい」

言いながら、葉くんはしつこく乳首をちゅぱ♡ちゅうっ♡と吸い続ける。背筋が伸びるような気持ちよさに腰を震わせている私に、彼は穏やかに言った。

「みこちゃん、パンツ濡れてない？ 大丈夫？」

濡れてないわけがないし、服の上からだろうと蒸れた感覚が伝わってしまっているのだろう。葉くんは少し腰を浮かせて、勃起したおちんぽをクリトリスに押し付けるように揺らした。

「あっ……♡ だ、だめってばあ……♡♡」

「クリに当たってる？ 気持ちいい？」

「よ、葉くん……♡♡ あ……♡♡もう、勃ってる、し……♡♡

ん♡……お、終わろ……♡♡」

これ以上はやばい。戻れない。

そう思って体を離そうとすると、葉くんは腰を掴まれてぐいと引き寄せられた。割れ目におちんぼがごり♡と当たって、小さく「んっ♡」と声が漏れる。

「勃ってるけど、俺、最近出してないからさあ」

「え……」

「このまま出したいんだよね」

「えっ」

それって挿入？　と一瞬焦るけれど、葉くんはすぐに「素股できる？」と問いかけてくるから少しホッとする。

とはいえ、だ。葉くんの硬いおちんぼに、にち♡にち♡と割れ目を擦られながらもあたふた答える。

「で、でも……あ……っ♡　そんなの……っ♡」

「お願い、みこちゃん」

「~~~~つ」

上目遣いを披露する瞳に、実家の犬・ケンタを思い出してしまった。例えば座椅子をボロボロにされたつて、こういう顔をされると私は弱い。末っ子同然の葉くんにも、同じ能力があった。

（い、入れるわけじゃないし……！）

入れなきゃセーフなんて、私は何歳あたりからそんな思考になったんだろうか。大人になったことだ。

腰を浮かせて、ショーツを脱ぐ。その隙に葉くんもズボンとボクサーパンツを下ろしていた。ぼろん♡と飛び出た怒張に、私は思わず目を奪われてしまう。

「……！」

（おっきい……！）

反射的に生唾までごつくんしてしまった。元カレのモノよりも、

一・五倍は大きい。何より長かった。子宮の入り口のあたりが勝手にずくん♡と疼き、同時に甘い痛みに変わってしまう。

（こんなの、ナカに入れちゃったら……っ♡ ……っで、違う！ そうじゃ！ ない！）

情けない邪念に一喝し、葉くんのおちんぽにおまんこを添えた。濡れてしまっているのがバレてしまうから恥ずかしい。でも、予想に反して葉くんは優しく笑った。

「あったけー」

子どもみたいなことを言っているけど、おちんぽは凶悪そのものだ。

（硬いし、おつきいし、太い……っ♡）

この上で動けば気持ちよくなれる。腰がそう勘づいてしまったように、勝手に動いてしまっていた。

「んッ♡ あ♡ ッ……♡♡」

ずり♡ずり♡と濡れたおまんこを擦り付けると、想像通りに快感がやつてきた。

（あ、葉くんのおちんぽすごい♡ 擦れるだけでちゃんと気持ちいいッ……♡ 腰振るの気持ちよくて……ッ♡ カクカク♡って止まないよぉ……ッ♡）

「あー……みこちゃんのおまんこ、お汁すご……気持ちいい……」

「は……っ♡ ん……、あッ……あ♡」

ずち♡ずち♡と愛液を絡ませながら葉くんのおちんぽを擦る。喘ぎを誤魔化そうとすると、息がはあはあと荒くなつて結局何も誤魔化せていなかった。

（だめ、これだめ、本当にやばい、腰止まんない♡ 葉くんのためじゃなくて、自分のために腰振っちゃってる♡ おまんこ気持ちいい

いつ♡ 奥がキュンキュン♡してイきたがつてる♡ 葉くんをイかせないといけないのにつ……♡)

「せっかくだし、みこちゃんも気持ちよくなろうよ」

「あッ、や♡♡」

こしっ♡ こしっ♡ こしっ♡ こしっ♡

私の葛藤を見透かしたような口ぶりで、葉くんが乳首を弄ってくる。大きな親指を横にスライドさせた葉くんは、乳首の先端を的確に掠めていった。勃起した乳首がその度に揺らされて、快感を子宮に下ろしていく。

「だ、めっ♡ あ♡ んん……ッ♡」

「俺だけ気持ちいいの、フエアじゃないじゃん」

コリコリ♡ コリコリ♡

同じ動きを保った親指は次第に乳首に近づき、何度も何度も乳首を

倒す。左右に倒される乳首に呼応するように、おまんこからじゅわ♡と愛液が溢れた。

（あっ♡ 乳首気持ちいい♡ お腹またキュンキュン♡しちやつてるよおっ♡ コリコリ♡って乳首倒されるのイイ……っ♡）

抗えない快感に喘がされていると、葉くんは乳首をコリコリ♡コリコリ♡と弄りながらも私の顔を覗き込んできた。綺麗な形をした瞳は、まるで作り物のようだった。

「乳首気持ちいい？ アンアン♡って可愛い声止まんないね？ エツチなみこちゃん」

「んっ♡ ち、が……ッあん♡ あ……ッ♡」

「でもみこちゃんの腰、へこへこ♡ってどんどん早くなってるよ？ 自分から気持ちよくなろうとしてんじやん。エツチ」

「っ……♡」

「でもみこちゃんが気持ちいいと俺も興奮するから、もつとしていいんだよ。みこちゃんのマン汁がローション代わりになって気持ちいいしさ」

葉くんの口から下品な言葉がたくさん出てくるから、注意したくなる。でも、最早そんなことができる立場ではない。

なんなら許された気すらしてしまった私は、さらにクリトリスを押し付けていた。葉くんのバキバキに硬いおちんぽに体重をかけると、クリトリスがグニゅ♡と潰され、揺らせばぬち♡ぬち♡と音がする。

またもや私を見透かしたみたいな葉くんは、優しく言った。

「お手伝いしてあげようか、みこちゃん」

「う、え……っ？♡」

「イっちゃやうそう、って顔してるもんね？」

カリッ♡ カリッ♡ カリッ♡ カリッ♡

親指でコリコリ♡と倒されていた乳首が、人差し指の爪で素早く引つ搔かれる。

（あ、イイ♡ すごい♡ 気持ちイイとこにおちんぼを当たってるっ……♡ イけちゃうかも♡ これ♡ 乳首カリカリ♡と腰へこへこ♡でこのままイっちゃうかもお……ッ♡）

「カリカリ♡気持ちいい？」

「んっ……♡ だ、め♡ 乳首……っあ♡ そ、そんなにカリカリ♡しないでっ♡ 葉くんッ……♡」

「必死にクリ擦りつけちゃって可愛い……みこちゃん、セックス好きでしょ？ 彼氏と別れて溜まってない？ ちゃんとオナニーしてんの？」

「も、そんなの……っ♡ どうでもいい、から……ッあ、ん♡」

「大事なことじゃん。みこちゃんもそう思ってるから、俺のを手伝ってくれてるんでしょ？」

「あッ♡ や、んうッ♡」

「乳首気持ちいいねえ、みこちゃん。ね、もっとエッチなこと言つて。俺が出さないと終われないんだから」

「エッチなこと、つて……っ♡ あ♡ んん……ッ♡」

乳首をカリカリ♡カリカリ♡と虐められながらも、考えを巡らせた。自分の意思で止まってくれない腰をぬちゅぬちゅ♡と揺らしながら、一緒にポンポンも揺らす。

「お、おちんぼ頑張れっ♡ んッ♡ あ、葉くんの♡ おちんぼ、ッ

あ♡ が、頑張れっ♡」

「頑張るよ。……で、みこちゃんはどうかされたいの？」

「ッ……♡」

そう言われた刹那、無意識に唾を飲んでいた。葉くんの低い声は全てを受け入れてくれそうなところにあって、それに吸い込まれるみたいに声が出る。

(指も、おちんぽも、止まってほしくない……っ♡)

「んっ♡ み、美琴の乳首いっぱいっ♡ 弄ってっ♡ バキバキちゃんぽで、あッ♡ 美琴のクリ、アクメ♡させてっ♡ くだ、さいっ♡」

「はは、みこちゃんかわい……」

私の言葉に薄っすらした笑みを浮かべた葉くんは、私の乳首をきゅ♡と摘んだ。そのまま強弱をつけてコネコネ♡と刺激されて口が開いてしまう。

「あ♡ だめっ♡ 乳首こねこね♡しちや……ッ♡ あッ、あ♡」

「強くされるの好き？ アイツに毎晩虐められてたん？ この可愛い乳首を？ ……うざあ」

「違……ッ♡ んッ♡♡ あっ♡♡ あッ♡♡ 葉くんっ……♡」

「腰へっこへこ♡で可愛い……。いきそう？ 誰のおちんぽでクリイキするのちゃんと言ってよ、みこちゃん。俺が興奮するように、全部ちちゃんと言って？」

クリトリスに葉くんのおちんぽを擦り付けるたびに愛液がぐちよぐちよ♡とうるさいけれど、頂点をめがけている私はもう羞恥心をかき捨てるしかなかった。葉くんは乳首をこねこね♡こねこね♡されながら、腰をへこつかせる。

（あ、イける♡ イっちゃう♡♡ イっちゃう♡♡ イっちゃう♡♡ 葉くんは乳首こねられて♡♡ イっちゃう♡♡♡♡）

「よ、葉くん♡♡ 葉くんのおつきいおちんぽで♡♡ 乳首こねこね♡されながら♡♡ あ♡♡ あッ♡♡ クリ押し付けて、イっちゃいます♡♡ んッ♡♡ やっ♡♡ おっ♡♡ あっ……♡♡♡♡♡ッ♡♡♡♡♡」

腰を反らせてクリトリスを強く強く押し付けると、火花のように弾けた快感が膣を襲った。

ビクビクビクッ♡と果てた私はおっぱいを葉くんに見せつける形になってしまい、その突き出された乳首を葉くんがぱく♡と口に含む。瞬時にれる♡と舐められて甲高い声が出た。

「やあッ♡」

反射的に逃げようとしたけれど、葉くんに腰を強く寄せられて叶わなかった。葉くんが私のおっぱいに向かって「えろ……」と呟き、ついでにと言うように乳首をちゅう♡と吸った。

「あっ、ん……ッ♡　だ、だめえ……っ♡」

「だめ？　みこちゃんの乳首、こんなにピンピン♡してんのに？　舐めてって自分から出てきちゃってんじやん、これ」

葉くんの舌は、れろっ♡れろおっ♡とその硬さを知らしめるように

乳首を弄んだ。かと思えば舌の先がつん♡つん♡と突いてきたりして、私の腰はその度に震えてしまう。

「あ、やつ♡ん……う……ッ、あ♡」

「やだって言うくせにすっげー硬いよ、みこちゃんの乳首。ほら、上向いていやらしい形してる」

「い、言わないで……っ♡」

「本当のことだから？ 恥ずかしい？」

羞恥心を煽ってくる葉くんは、私の顔を眺めながらちろっ♡ちろっ♡と乳首を舐める。そうやって可愛がったかと思えば、彼は低い声で私にピシヤリと言った。

「腰、動いてないよ」

指摘されながら腰をすりすり♡と撫でられてビクついてしまった。乳首の快感に声を漏らしながら、再び腰を揺らす。

「んん……ッ♡ ふ……ッ、……あ♡」

「ピクピクしてんのエッロ……。乳首舐められるの気持ちいい？ 勃起乳首ちろちろ♡されると、エッチな声出ちゃうね？ ……可愛い」

「やあ……っ、あ♡」

ちろ♡ちろ♡と繰り返される快感から逃げようと葉くんの腕を掴んでみても、私の力では全く歯が立たなかった。

（に、逃げられない……っ♡ 乳首ずつとちろちろ♡されて気持ちいいけど、こんなの続けちゃったらだめだ……♡♡ 逃げなきゃ……♡♡）

乳首を可愛がられながら逃げ道を考える私の胸に、葉くんがちゅ♡とスを落とした。ちくりとしたから見下ろすと、赤いマークがいとも簡単についてしまっている。拍子にパチっとなぐると目が合った。

「みこちゃん……」

見たこともないくらい苦しそうな顔だった。ドキッと跳ねてしまう心臓へ追い討ちをかけるように、葉くんがカクカク♡と腰を動かしておまんこを擦る。

「う、あっ……♡」

「俺もうヤバいわ、みこちゃんにぶち込みたい」

何を？なんて聞くまでもない。葉くんはが硬くなったおちんぽをびしょ濡れのおまんこにずりずり♡と擦ってくるから喘ぎながらも答える。

「だ、め……っあ♡ そんな、の……ッ、ん……っ♡」

（逃げないと……っ♡）

膨れ上がる葉くんの興奮から逃れようと彼の腕を掴んでみたけれど、やっぱり力では敵わない。それどころか意図的に擦られたおまんこに「あッ♡」と浅ましい声が漏れた。

（おちんぼごりごり♡されるのやばい……ッ♡ 奥がジンジンって なっちやつてるっ……♡ このままじゃ、ほんとに……っ♡）

「俺とみこちゃんの仲じやん。昔から俺が怪我したら手当してくれてたでしょ？ あれの延長だよ」

果たして本当にそうなんだろうか？ 違う気がする。でも、葉くん の堂々とした論理にぼうつとした頭が反論してくれなかったのだ。

ぐちよぐちよ♡に濡れているおまんこだって、凶器のような怒張を まるで自分の一部だと主張するかのように包んでしまっている。

「みこちゃんも苦しそうだしさあ」

「っ……♡」

「俺も腰止めらんないし」

葉くんが私のおまんこを目掛けて腰を揺らすたびに、にち♡にち♡ と音がする。トロトロに密着した私たちは境界線無くしかけてい

た。葉くんのカリが少し入っても、抵抗できる摩擦なんてものは一切ない。

（あ、あッ♡ いま葉くんのおちんぽの先一瞬入ってたあっ♡ だめ♡ 先っちょだけでもお腹喜んじやってるっ♡ 逃げなきやっ♡ 逃げなきやいけないのに……っ♡♡）

「ほら、今ちよつと入っちゃったね？」

言いながら、葉くんはずりゆずりゆ♡とおちんぽを擦るのをやめてくれなかった。腰を掴まれて大きく揺さぶられ、タイミング次第ではカリは一瞬だけ私の入り口に潜ってしまふ。

「あッ♡ だめっ、んッ♡ 入っちゃう、葉くん……っあ♡」

「入っちゃうねえ。こんなトロトロまんことバキバキちんぽ、相性良すぎだもん。もうちよと角度変えたらずっぽり♡だよ」

（ずっぽり♡ 本当にずっぽり♡入っちゃう、これ、だめっ♡）

葉くんの言う「ずっぽり」を想像すると、濡れそぼった膾壁が狭く
なった。だめなのに、と思いながらも葉くんのカリの行く末をじいつ
と見つめてしまうし、逃げているのか合わせているのか自分でも分か
らない動きを繰り返してしまう。

「んッ……♡ あ♡ つ……♡♡」

「つつか、ダメダメ言いながらみこちゃんも腰へこへこ♡しちやっ
てんじやん。ねえ？」

「……！」

「……本当に『ダメ』なの？」

「ひ、あ……ッ♡」

耳元で改めて確認されると、ぞわぞわと鳥肌が立っていった。イエ
スともノーとも言い切れずに黙ってしまう。すると、部屋の中はぐち
♡ぐち♡、ぎしぎし♡、はあはあ♡といやらしい音しなくなつて、

余計に思考が崩れていった。

(入っちゃう……っ♡ 入っちゃうっ……♡ 葉くんのおちんぼ入っちゃうよおっ♡ 葉くんのおっきいの♡ ナカに♡ もう入っちゃうっ……♡♡)

「聞いてる？ みこちゃん」

返事がない私を追い立てる葉くんは腰の動きを大きくさせた。葉くんが腰を引いた瞬間に私の腰が彼に沈み込み、何故かそこに『通路』が見える。

このまま、葉くんが少し強引におちんぼを動かしたら。

「あ、待って、あっ♡ あ、あ……あッ♡」

それは一瞬のことだった。

(あ♡♡)

何かが入ってきたではなく、気がつけば「入っていた」。あれだけ

濡れていたし、硬かったのだ。飲み込むのなんか一瞬でしかない。

「あ……あ……」

葉くんの呆れのような愉悅のような「あーあ」が終わる前に、私の膺は葉くんのおちんぽをずっぱり♡と飲み込んでしまっていた。

「みこちゃんがアンアン♡言いながら腰へコつかせるからあ」

思考が追いついてない私を揶揄うように言う葉くんが、ぐりッ♡ぐりッ♡と奥の奥までおちんぽを挿じ込む。

「あ……ッ♡」

「俺のちんぽ、みこちゃんのナカに入っちゃったねえ」

処女じゃないのに『異物』が入り込んでいるような気がして、頭が混乱する。

（何これ、何これ、おっきい♡ おっきい♡ なんでこんなとこまで届いてるの♡ こんな、こんなの……っ♡♡）

とにかく、大きい。私の膣はこんなに奥まで繋がっているのかとびつくりした。誰にも触れられず知らん顔していた最奥が、知らない快感にピクッ♡ピクッ♡と震えていた。

「みこちゃんのカ、やっぱ……」

私のナカにずっぽり♡入っている葉くんは、眉間に皺を寄せながら笑う。そうして、緩やかに腰を動かし始めた。

「あ♡ 待つて……っ♡ 待つ、てえっ♡♡ あッ♡ あッ♡」

こんッ♡ こんッ♡ こんッ♡ こんッ♡

ほんの少し揺すられただけなのに、一番奥を刺激されて短い喘ぎが止まらなくなる。葉くんの先っぽは、窮屈そうに私の最奥でノックを繰り返した。

（何これ♡ しゅごい♡ 奥まで♡ 入っちゃってるっ♡ そんなとこ誰にも触られたことないのに♡ 一番深いところに届いちやっ

るっ♡ 奥氣持ちイイ♡ 氣持ちイイっ♡ こんこん♡されるの声止ま
まないよおっ♡♡)

「あっ♡ んうっ♡ は、あッ♡ んッ、あっ♡♡」

「ほらみこちゃん、アンアン言っでないで応援してよ。みこちゃんのおまんこで俺頑張るからさ」

「あっ、あッ、あ♡ んっ♡」

得体の知れない快感に乱されながら、葉くんの肩をギュツと握った。手に持ったポンポンが葉くんの肌に触れると葉くんは「くすぐりたい」と言う。単純なことしか考えられない私はポンポンを手放し、汗ばむ手で葉くんの首と肩の境目にしがみついた。

間近にいる葉くんに女の顔を見られつつも、必死に声を振り絞る。

「ん……ッ♡ 頑、張れ……っ♡ よお、くんっ♡ おちんぽごしごし♡ っ……っあ♡ あッ♡ 頑張れえっ……♡ つん♡ あんッ

♡

「はは、エッロ」

「がんば、ってっ♡ おッ♡ あっ♡」

「頑張るよ。みこちゃんのごちよごちよ♡おまんこでいっぱいごしごし♡するから、みこちゃんも頑張ってよ？」

「やあッ♡ 速くしちゃ、あ……ッ♡ だ、めえっ♡ ぐ、あッ♡」

こちゅッ♡ こちゅッ♡ こちゅッ♡ こちゅッ♡

私の腰を掴んでピストンを速めた葉くんは、もう喘ぐことしかできなかった。葉くんはだらしのない私の顔を見て笑っていて、私は目が合わないように葉くんの綺麗な鎖骨をジッと見つめる。

（やばい♡ これすごいっ♡ 葉くんのおちんぽすごいっ♡ 膣壁全

部擦られてる……っ♡ 奥まで突き刺さっちゃってるよおっ♡）

「締まってきた……」

「だめっ♡ だめっ♡ あ……ッ、ん♡ 葉くんっ♡ 私、もう、イっちゃ……っ♡」

「イって？ みこちゃんがイくとこまた見せて」

「や、だめ……ッ♡ あ♡ あッ♡」

「ほらほら、頑張れみこちゃん♡ 頑張れ♡ おまんこごしごし♡ してアクメ頑張れ♡」

とちゅッとちゅッ♡と奥をリズムカルに奥を突きながら、葉くんは私の乳首をぱくっ♡と咥えた。間髪入れずに口内でれろれろ♡れろれろ♡と舐められ、子宮が小さくなる。

「あッ♡ 乳首しちや……っ♡ あっ、ん……ッ♡ ああっ♡」

「頑張れみこちゃん♡」

「だめ、だめっ♡ ほんとにつ……葉、くんっ♡ 乳首……らめなのお……っ♡ あッ♡ あっ♡ やッ♡ キちやうっ♡ キちやう

♡ おッ♡ あ……ッ……んう………ッッッ……♡♡♡♡」

溜め込んだ快感を解放するように、ビクビクビクッ♡と体全体を震わせた。絶頂で震える子宮は私の意思に反して痙攣を繰り返した。

(すっごい……っ♡ おっきいアクメしちゃったあ……っ♡♡ 幼馴染なのに……っ♡♡)

背徳感が伴う快感で息を荒くしていると、同じように息を荒くする葉くんがぼそつと呟く。

「すっげー締め付け……」

「え、待つ……！ ひゃあっ！」

私を抱えるような仕草をした葉くんは、高い悲鳴を無視してそのままソファーへと私を押し倒した。

突然のことに戸惑っていたらその隙に腰を持ち上げられて、挿入されたままのおちんぼをずちゅッ♡ずちゅッ♡と叩きつけられる。

「ひっ♡ あっ♡ だめっ♡ あっ♡ 葉く……っ♡ イ、いった
ばっかりだか、らあっ♡♡」

「みこちゃんばっかイってるじゃん。早く俺もイかせてくんない？
みこちゃん。エツチな声で頑張れ頑張れ♡してよ。ほら。早く」

「いっ♡、あっ♡ 待っ♡ 待ってっ♡ 待ってえっ♡♡」

（いったばっかりなのにつ♡ こんなにバキバキ♡なおちんぽでズコ
ズコ♡されちゃったらやばいっ♡ またイっちゃうっ♡ イっちゃ
うっ♡ またアクメきちゃうっ♡）

きゆうきゆう♡と我慢が効かない膣内に翻弄されていると、葉くん
は短い喘ぎを繰り返す私を見下ろして笑った。目を細めて、何かを我
慢してるかのような表情だった。

「あーすっご……みこちゃん、ナカ締めすぎなんだけど。そんなに久
しぶりのセックス気持ちいい？」

「だっ、てっ♡ ツ、あ♡ だめっ♡ 葉くんそこらめっ♡」

「んー？ ここ？ ここ擦られるの、気持ちイイんだ？」

腰を持ち上げられたまま上の方をぞりぞり♡と擦られると、その快感で腰がガクガク♡と震えた。嬌声が、一際高くなっていく。

「あ、やだやだやだっ♡♡ だめだめ待ってえっ♡♡ またすぐ
イっ……ッ♡♡ ぐう♡♡ あ……ッ♡♡ ひッ……あ、あッ……

あ~~~~ッ♡♡」

（ま、またイっちゃった♡♡ イイところちよつと擦られただけなの
に……っ♡♡）

葉くんに快感を与えられすぎた膣内は、どこもかしこもぷっくり♡と腫れ上がってその隆起全てが性感帯になっているようだった。言うことを聞いてくれない体に、じわりと恐怖が滲む。

だって、葉くんのおちんぽは未だ凶悪に反り立って私のナカにずっ

ぽり♡入ってしまっているのだ。

一体私は、これから何度イカされてしまうのだろうか。

(あ♡ 想像したらナカがまた……っ♡♡)

浅ましいにも程がある。恐怖と期待が混じった感情で混乱した。
葉くんは、一層眉を顰めていた。

「まーた俺より先にイった。何してんの、みこちゃん」

「あっ♡ ぐ♡」

「まんこきゅうきゅう♡させちやってどんだけ溜まってんの？ 俺以上じゃん、エッチ」

「ち、ちが……っあ♡ んっ♡ よ、葉くんのが、おつきいつ♡ か
らあ……っ♡」

「へえーそうなんだ？ 俺のちんぽおつきい？ アイツより？ みこちゃん、おつきいちんぽ好き？」

とん♡ とん♡ とん♡ とん♡

葉くんが私の最奥を目掛けて腰を打ちつけるたびに「あっ♡ あッ♡」と声が出た。その度に思考が全部リセットされるようで、半分以上の空のような声で葉くんに答える。

「んっ♡ あッ♡ き、気持ちいい♡ は……っあ♡」

「おっきいちんぽ大好き♡って言うところでしょう、ここは。俺のちんぽのために頑張るの忘れてない？」

「ひんッ♡ ご、ごめんなさっ、いっ♡ お、おっきいおちんぽ、大好き♡ です♡ あっ、あっ、葉くんのおちんぽ♡ しゅきいっ♡ んっ♡ 奥まで♡ 届いてっ♡ 気持ちイイ、よおっ♡♡」

「あー……ちんぽにクル……」

自分の台詞が媚びた内容であることに、葉くんの反応でやっと気づいた。けれどそれを恥じる暇もなく、葉くんはより勢いよくおちんぽ

を打ち付けてくる。とんッ♡とんッ♡と跳ねるようなりズムに口が閉じられなくなり、口内がどんどん乾いていった。でも気にしてられない。

「あッ♡ だめッ♡ あっ♡ おっ♡ 奥っ♡ とんとん♡しない、
でえっ♡ おっ♡ んっ♡」

「奥とんとん♡好き？ かーわい。ほら、とんとん♡ とんとん♡」

「ひっ♡ あ♡ だめっ♡ だめっ、て♡ あッ♡ ッうん♡」

「かわいい顔……」

葉くんが恍惚の瞳で私を見つめる。それを真正面から受け止める余裕はなかった。葉くんの腰がとんとん♡と動く様子から、目が離せない。

（あっ♡ あっ♡ やばい♡ とんとん♡とんとん♡って♡ イク♡
またイっちゃう♡ あ♡ あ♡♡）

「まって、まって、葉くんッ♡ あっ♡ あッ♡ キチャうつ♡ ぐん♡ あっ♡ あ♡♡♡」

「いきそう？ 気持ちイイね？ とんとん♡ とんとん♡ ガキの頃、寝る時にみこちゃんがとんとんしてくれたの思い出すわ。こうやって優しくとんとん♡とんとん♡ってしてくれたっけ」

「あッ♡ 待っ♡ と、止まっ♡ てッ、んっ♡♡」

「なんで？ 気持ちイイならいいじゃん。たまにはみこちゃんに恩返ししねえと、何も返せてねーもん」

「あッ♡ あッ♡ あ……ッ♡♡」

決して速いスピードじゃないのに、とんとん♡とんとん♡は確実に私を絶頂へと押し上げていく。

（同じリズムでおっきいのが出たり入ったりしてるっ♡ だめっ♡ だめえッ♡♡♡）

「葉くんっ♡ 待ってっ♡ 待ってえっ♡」

「あーほらまた締まってきたね。とんとん♡ とんとん♡ 頑張れ

♡ 頑張れ♡」

「あゝゝゝっ♡ だめだめだめ♡ いくっ♡ いくいくいくイ
く……っ♡♡ あ♡♡ あ♡♡ イ……ぐう……ッ♡ ゝゝゝッッッ
♡♡♡」

葉くんに掴まれた腰を大きく反らせて達したけれど、葉くんの手は
離れてくれなかった。絶対に逃してくれない手にまた力が入り、とん
とん♡が再開される。

「はは、おっきいアクメ。でも俺、まだ一回もイけてねーんだけ
ど？」

「やッ♡ あッ♡ ま、待ってっ♡♡ 葉くんっ♡♡ 待ってえっ
♡♡♡」

「いや俺EDだから待ったらまた萎えちゃうじゃん。ほらほらみこちゃん、頑張れ♡ 頑張れ♡ 雑魚まんこもつと締めて♡」

とんとん♡とんとん♡を続ける葉くんは、今度は乳首をギリッ♡と摘まれた。形が変わるくらい押し潰されたのに、痛みを通り越した快感が頭まで上ってきて頭の隅がチラチラ光る。さつき掴んだ絶頂を、掴み直すような感覚だった。

「ひいんッ♡ あ……ッ♡ あ……っ♡ っ……ッ……♡」

乳首を摘まれたまま絶頂を掴み取り、ビクビクッ♡♡と体が揺れる。その痙攣を抑えるように、葉くんは私に覆い被さってきた。

そして当然の如く、ちゅ♡と私にキスをする。

「みこちゃん、結構M？ クッソ可愛いんだけど。俺そういうの得意だよ、虐めてあげようか」

「やだあッ♡ あ、葉くん♡ ダメッ♡ もうダメだからあッ♡♡ 動いちやらめえッ♡♡」

「そんなこと言わないの♡」

私の口癖を真似るように言う葉くんは、また私にキスをした。喘ぎで震える舌をにゆる♡と絡め取られ、これ以上跳ねようがない心臓が変な方向に飛び跳ねる。

（私、葉くんとキスしてるっ♡ あ♡ だめっ♡ 気持ちいい♡♡ 葉くんとセックス気持ちいい♡♡）

否定できない事実がドカドカと私の心臓を踏み躪っていった。

満身創痍な心臓にとどめを刺すように、葉くんが私に体重をかけてくる。葉くんの大きな体で、私の胸や腰は一切の逃げ場もなくしてしまった。

葉くんの腰の動きが速くなる。呼応するようにぱちゅッ♡ぱちゅッ

♡と音が鳴り響いた。

「あ~~~~♡♡♡ やだっ♡ やだアっ♡ これやだっ、あッ♡
葉くん♡♡♡」

「やだねえ、気持ちイイねえ♡」

まるで子どもをいなすような口調で言った葉くんは私にのしかかりながらおちんぼを打ち付ける。合間に、今まで忘れていた分とでも言うようにちゅ♡♡ちゅ♡♡とキスが降ってきた。

「や、待っ……♡♡♡ ま……♡♡♡、んっ♡♡♡ あっ♡♡♡ あ……あっ♡♡♡
~~~~♡♡♡~~~~♡♡♡~~~~♡♡♡」

「はは、またイっちゃった。やだっって言いながらおまんこ締めて可愛い、みこちゃん。可愛くておちんぼごしごし♡すんの止まんねーわ」

「だめえ♡♡♡ も♡♡♡♡♡ 葉くん♡♡♡♡♡ 出ちやう♡♡♡♡♡ お潮吹い  
ちやうから♡♡♡♡♡ 葉くん♡♡♡♡♡ やらあ♡♡♡♡♡」

「何それかわい……じゃあお潮も頑張ろつか、みこちゃん。上から  
いっぱいパンパン♡しちやおうな」

「っひ♡ おッ♡ だめっ♡ あッ♡ あッ、あゝゝゝゝゝッッッ  
♡♡♡」

ぷしッ♡と吹き出るお潮で葉くんの体が濡れてしまう。けれど葉くんは一切気にしなかったし、押してもびくともしてくれないし、余計に音を立てる体同士をパンッ♡パンッ♡とぶつけ合った。

「びッ♡ や、あッ♡♡ 葉くんッ♡♡ よおくんッ♡♡」

「潮やっぱ……イクのしんどいねえ、みこちゃん。頑張れ♡ 頑張れ♡」

「ゝゝゝッッッ♡♡♡」

絶頂して収縮しきった膣内はこれ以上締まりようがないのに、どう  
いう仕組みなのか絶頂したおまんこが再び絶頂してしまう。再びプ





絶頂しながら混乱と快感で瞬きの回数が増えた。そのうちパチパチ弾けてしまいそうな思考だ。何も考えられなくてただ嬌声を上げていたら、葉くんは笑った。

「ゆっくりなのにイくの止まんないねえ。おまんこバカになっちゃった？ もうちよつと頑張つて、みこちゃん♡」

とちゅッ♡ とちゅッ♡ とちゅッ♡ とちゅッ♡

奥までずっぽり♡と入ってしまったている太いおちんぽが、同じリズムで出入りするだけで私のナカは悦んでしまう。徐々に徐々に何かが準備されていて、突かれるたびに快感に似た恐怖で涙が滲む。

「だッ、め♡♡ も、葉くん……ッ♡ あッ♡ おっ♡ だめ、だめっ♡♡ ほんとにっ♡♡ とんとん♡やめてえっ♡♡」

嬌声混じりに抗議すると、葉くんは「はは」と薄く笑って私にキスをした。優しい優しい唇と、優しい優しいとんとん♡が繰り返され

る。

「みこちゃんかわいい……出したくねー……」

葉くんの仕草はまるで「可愛い彼女」への言動だった。本来なら見  
てはいけないものであるかのように思える。言いようのないチグハグ  
感に、心臓が痛くなった。

（本当に、心臓おかしくなる……っ♡ は、早く出してもらわない  
とっ……♡）

終わりが見えない気がして焦った私は、喘ぎ喘ぎ葉くんに言った。

「だ、だめ……葉、くんッ♡ 出してえっ♡」

「へえ、ナカに出していいんだ？」

「！」

何も考えずに発言してしまった私が悪い。もちろんそんな意味では  
ない。

「違う」と否定したかったけど、その前に葉くんは「そういえば」と言葉を続けた。とんとん♡とおちんぼの動きは継続されたままだ。

「昔からピル飲んでたよね？ 棚に置いてるやつ、昔飲んだのと一緒にだし」

「あっ♡ やっ、だめッ♡ あッ♡ 葉くん、ナカは……ツんうっ♡ はあっ♡」

「否定しないってことは、やっぱりそうだ。あーやばい、精子上がってきた。みこちゃんに出せるとかほんとやばい、スッゲー興奮する……」

「だめっ♡ だめっ♡ あッ♡ あっ♡ あッ♡♡」

ぼちゅッ♡ ぼちゅッ♡ ぼちゅッ♡ ぼちゅッ♡

とんとん♡とリズムよくノックしてきていたおちんぼは、しっかりとスピードを上げていった。体重をかけられたまま思い切りおちんぼ

を打ち付けられて目の前が真っ白になっていく。私の意識を繋ぎ止めるために、葉くんがちゅっ♡ちゅっ♡と可愛らしいキスを降らせていった。

「可愛い。みこちゃん、可愛い」

「あッ♡♡♡ ぐッ♡♡♡ やらッ♡♡♡ やらあッ♡♡♡ あ、あ、ぐッ、ぐッ♡♡♡ あ、あッ……あ……ッ♡♡♡」

「イキ顔すつご……みこちゃん、まだまだよ？ もうちよつと頑張つてな？ トんだら勿体無いからさ。ほら、頑張れ♡ 頑張れ♡ 雑魚まんこ頑張れ♡」

「や……ッ♡♡♡ イってる♡♡♡ イってるのお♡♡♡ よおくん♡♡♡ だめだめだめ♡♡♡ イ♡♡♡ ってる、の、に……ッ♡♡♡ ぐ……う……ッ……ッ♡♡♡」

（馬鹿になる♡ 馬鹿になっちゃう♡ おまんこ馬鹿になる♡♡）

馬鹿の一つ覚えみたいになんな言葉で頭の中が満たされて、気を抜いたら葉くんのどっしりとした圧に押し潰されそうだった。

苦しくて涙が出るけれど、おちんぽを打ち付けながらキスをすることに忙しい葉くんは気づいていないようだった。ちゅう♡と私の唇を少しだけ吸い、彼は耳元で言う。

「とんとん♡で一緒にイこうな、みこちゃん。俺の方向いて。俺にも頑張れ♡って言って？」

「や……ッ♡♡　んッ、っ……お♡♡」

もはやマトモな言葉は紡げない私の頬を掴み、葉くんは私の顔を固定した。汗も涙も涎も鼻水も全部出てしまっている気がするけれど、それを正しく感知する余裕はない。

兎にも角にも、きつと酷い顔をしていることだろう。

おそらく正解である私の予想に対して、葉くんは思いがけない反応



下ろした。葉くんの頭の向こうにはシーリングライトが光って眩しい。なのに、葉くんの方が眩しそうな表情をしていた。

「あー……………可愛い……………」

そう言ってまた私にキスをする。

葉くんがそんな顔をするようになったなんて知らなかった私は、暴れる心臓を携えながらただただそのキスを受け入れるしかなかった。

（続きは本編にて！）



サークル名：オンリーユー

著者：水瓶

読んでいただき、ありがとうございました！